



# 幼児の家庭生活の心理

三

浦

武

人間の行動はその表面に現れているものだけで判断してはいけない。行動の奥にひそむ隠れた原動力をつきとめなくてはいけない。その隠れた力は意外のところにあることも多い。幼稚園や保育所での幼児の問題行動の真の原因は施設の中ではなくて、その幼児の家庭生活の中に見出されることもしばしばである。幼稚園で先生にひどく甘えてまわりつく子が、その家庭生活では親への愛情の要求が満たされていない為であることがわかったり、あるいは幼稚園でいじめっ子で困る子が、調べてみると家庭で親からひどく抑圧されていることの腹いせであることがわかつたりする。したがって幼児教育にたずさわる者は幼児の家庭生活がどのようにおこなわれているか、そしてそれが幼児の心理をいかに動かしているかを研究する必要があると思う。

幼児の家庭生活を構成するものは対人関係といえば両親、祖父母、同胞、使用人などの関係である。両親や祖父母の親子の態度、同胞の間での心理的位置などは重要である。しかも両親が子ど

もに接する時の気持を子どもは必ずしもその通りに受けとっているとは限らない。親の側の意図は子どもに誤解されていることもあるし、また成人と子どもの心理の違いによって両者の間にずれが必然的に生ずることもある。成人がよいと思うもの、価値があると思うことを子どもは必ずしもそうは受けとっていないことがある。未亡人は子どもの成長だけを頼りにして、とかく子どもの教育に過度に熱心になり易い。しかし子どもへの愛情過多から、干渉が過ぎ、かえって子どもからはうるさいと感じられていることが多い。子どもが衣服やからだを汚す心理と、それを世話し、あと始末をする養育者の側の気持とではくい違っていることが多い。

われわれの研究グループは父母と子どもの接触するいろいろの場面について調査研究してきた。その一つに親子の愛情関係がある。「家の中で一番好きな人」と「家の中で一番嫌いな人」を子どもにも聞き、一方父母には、その子を特にかわいがっているか、普通か、余りかわいがっていないかの三段階で答えてもらつて、その二つの

表 1

子どもの答		調査 B		調査 A	
家の中で一番嫌いな人		家の中で一番好きな人			
母と答えたもの	父と答えたもの	母と答えたもの	父と答えたもの	父の答	母の答
	30		20%	非常にかわいがっている	幼稚園
	14		36	普通	
	0		0	余りかわいがっていない	
0		25		非常にかわいがっている	
9		29		普通	
100		0		余りかわいがっていない	
	0		50	非常にかわいがっている	小学校
	5		38	普通	
	0		0	余りかわいがっていない	
0		100		非常にかわいがっている	
10		32		普通	
0		50		余りかわいがっていない	

ものの間の関係をみると表1の如くなつた。

被験者は幼稚園児四〇名および小学校二年生五〇名（ランダムに抽出した）である。この結果をみると父母の側のかわいがつているつもり、あるいはかわいがつていなければ、案外子どもには違つて受けとられていることがわかつた。母親と子どもの間の方が愛情の感心率（親がその子を最も愛していればその子はその親を一番好きと答えること）は高いが、父親と子どもの間ではちぐはぐになっている割合が多い。もつともこの場合、子どもが父や母を好きに

思うのは親が自分をかわいがつてくれているという子どもの側からの認識と必ずしも並行するわけではないので、親子間のずれはこの場合焦点が少しずれではいるが、しかし從来愛情の相互性として言われてきたこと、すなわち親が子をかわいがるのでその子どももその親が好きになり、子どもがなついてくるので親は一層その子どもがかわいくなるという力動的関係はそう単純にわり切つてしまえないものがあることを示唆している。

また親の嫌けのタイプではどんなのが子どもに好かれたり、嫌われたりしているかを見るとわれわれの調査ではそうはつきりした結果ではないが、大体の傾向を言うと、幼稚園児に好かれている父は感情的であり、嫌われている父は独立助長的である。嫌われている母は理知的、独立助長的である。小学校二年生に好かれている母は形式的禁止的であり、嫌われている母は感情的、独立助長的であった。幼稚園児、小学校二年生に共通して言えるのは独立助長的な母は嫌われていることである。われわれの考え方からすれば独立助長的な養育態度は新教育の精神に合致したものであり、それは子どもの健やかな心身の成長の為に好ましいことと思うのだが、子どもの側からはずしもそれは喜ばれていない場合があることがわかる。

次に、子どもの不満がどこにあるかを調べてみると、「欲しいものをよく買ってほしい」などという物質的なことよりは「もつと一しょに話をしてほしい」とか「御用がよくできた時はもつとほめてほしい」などという欲求の方が不満が多かつた。勉強させたり、用事

を言いつけたりすることには余り不満は多くない。こういうことにも案外気がついていない親が多いのではないか。

親が子どもと一しょによく遊んであげるか、よく話をしてあげるか、よく遊びに連れて行ってあげるかなどの十四項目について、非常によくやる、普通、余りしない、の三段階のどれかにチェックして親に答えてもらった。それに対応して子どもにも「お父さんにもっと一しょに遊んでもらいたいですか」などの項目について「はい」か「いいえ」か答えてもらった。「いいえ」と答えたときは、一応満足していると考えられる。その親子の考え方の組合せを作ると表2のようになります。そのうちABC Dと記入した組み合わせはいろいろ問題を含んでいる。

Dは親が非常に子どもの為にしてやっているのに子どもはもつと

やつてほしいという関係であり、Cは親は余りしてやらないでほつたらかしなのに子どもは親に要求していないという関係である。Dに該当する項目が多いのは次のような場合である。

①親子関係が親密な場合

②親が育児に熱心で子どもが親に依存的な場合

Cに該当する項目が多いのには次のようないふたつの場合がある。

①親子間が冷たい関係で疎遠な状態である場合。

②子どもがしっかりと親に依存していない場合。親も子どもを信頼してほつたらかしている場合。

DもCとともに親子関係について健全な場合と病的な場合とが混っているのでそれを分析するのがむずかしい。

ひとりの子どもについてDが幾つの項目についているかを見て、それをD点として幼児性行評定尺度の総点(この点が高いことはよいバーソナリティであることを示す)との関係をみると、幼稚園児では父との関係でD点が高い子の方がバーソナリティがよい傾向がある。幼児にロールシャッハ・テストをおこない、精神の健康度を示す総合的指数を算出して、これとD点を照應させるとD点の高い子は精神が健全であることが示された。明暗反応が多い子ども(これは暗い感情が多いと考えられる)はD点が少ないこともわかつた。

一つの調査項目についてDとAを比較してDがずっと大きいのは親が子どもにサービスをすればする程子ども欲求が強くなることを示し、DとAとの差が少ないので子どもにサービスすると子どもはかなり満足することを示している。こういう観点からみると、「欲しいものを買つてもらいたい」「困った時すぐ助けてもらいたい」「よその家を訪問してお行儀よくできた時や、頼んだことをその通りにできた時はほめてもらいたい」などの欲求は満足させるとますます強くなる傾向があることがわかつた。

次に、親に子どもの接觸について、どのようにしているかいろいろの項目について聞き、更にその同じ項目について、あなたのお

表 3

調査B			調査A		
			父・母		
子	ど	も	非	通	余
はい	いいえ	?	常	通	り
D	A		に	し	な
			る	る	い
B	C		い	う	う

表 3

母	父	接觸の得点		④
		親	和	
119	112	親	和	
129	124	保	護	
122	127	意志尊重		
115	129	圧	力	
121	123	平	均	
111	116	親	和	⑤
721	129	保	護	
122	112	意志尊重		
125	112	圧	力	
120	118	平	均	

表 4

母	父	接觸の得点		⑥
		親	和	
-8	+4	親	和	
-8	+5	保	護	
0	-15	意志尊重		
+10	-17	圧	力	
-1	-5	平	均	

(A)は親に普通に聞いた場合であり、(B)は子どもはどう答えると思うかを親に聞いた場合である。「圧力」の点が高い時は親が子どもに対して圧力をかけていないことを示している。

(A)を引いてみると表3のような結果が得られた。更に(B)から合わせて整理してみると表3のような結果が得られた。

子さん(幼稚園児)に聞いたたらお父さんやお母さんは自分(子ども)に対してそういうことをどの程度やってくれているとあなたのお子さんは答えると思うかを再び父・母に聞いてみて、その二つをつき合わせて整理してみると表3のような結果が得られた。

なおここで引用したわれわれの研究は森重敏氏、三輪正氏との共同研究によるもの一部である。

(東京都立大学)

よで、母親はその点正反対で楽観しており、逆に親和、保護が、実際に子どもに対してやっている程には子どもは受けとつてくれないのでないのではないかと考えているようである。子どもはこういふ項目について実際どう受けとっているかについてはまだデータの整理ができないのでここでは触れられないのは残念である。

以上家庭生活における父—母—子の接觸がおこなわれるいろいろな場面についての行動としてのくい違いおよび意識のずれをいろいろ上げてみたが、こういうずれがある限度以内であればあまり問題は起きないとと思うが、非常に著しいずれが生じている時、そういう親は幼児の気持をよく洞察していないことを示しており、また子どもとの間に距離があることを示している。そういう家庭においては問題の子どもが発生する恐れがあると言える。そしてこういう問題は親子間の距離があることを示している。

家庭生活から生じたフラストレーションの解決が幼稚園や保育所にもち込まれて施設での問題行動の原因となっていることもあるであろう。幼稚園などの先生がたが家庭訪問をなさる時、問題児についてはこういう点にも着眼し話し合われたらよいだろうと思う。またそういう親子間のずれを手取り早く見られるようなテストが作製されることが期待される次第である。われわれの方法では幼児にいろいろ聞く時の幼児の答の信頼性に問題があり、この点何かプロジェクト的な工夫がなされるのが望ましい。